

調布市社会福祉協議会
東日本大震災 第1期復興支援ボランティア派遣報告
(岩手県遠野市から沿岸部へ)



派遣日程：平成23年7月17日（日）～20日（水）【3泊4日】

派遣目的：味の素スタジアムの避難所での活動の流れを受け、ボランティア意識の高い調布市民を、広範かつ甚大な被害を受けた東北地方沿岸部に派遣し、官民協働で継続的に復興支援を行う。

支援地：扇の要のように沿岸各地とつながっている地の利を生かし、物資運搬や救援活動の後方支援を行ってきた岩手県遠野市で、ボランティアのベースキャンプ的な役割をしている『遠野まごころネット』のもと、今回は大槌町にて活動。

活動内容：大槌町を流れる小槌川河川敷の草取りと流れ着いた瓦礫の撤去。炎天下の中、胸の高さまで生い茂った蔦の絡まる草を、鎌による手作業で刈る。2日目は川の中に入り瓦礫の撤去。今年8月のお盆、特別な意味を持つ『灯籠流し』の会場作りと、鮭の遡上環境の整備を行った。

宿泊場所：遠野市材木町自治会館（女性）、大日地区コミュニティ消防センター（男性）

移動車両：調布市委託大型バス（武州交通）

派遣人員：合計20名（在住・在勤・在学等ボランティア11名、企業派遣ボランティア3名、調布市職員2名、社協引率職員2名、運転手2名）

事前オリエンテーション： 7月11日（月）15：00～17：00
7月12日（火）18：00～20：00

行程及び内容：

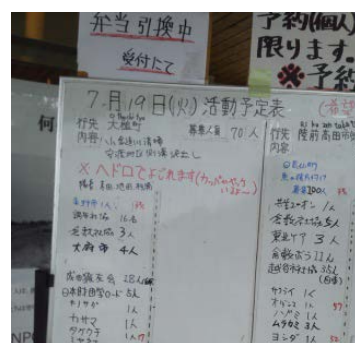
1日目

- 8 : 00 調布市役所駐車場西側集合・挨拶・出発
- 10 : 00 東北道上河内 SA にてトイレ休憩
- 12 : 00 安達太良 SA にて昼食休憩
- 14 : 00 前沢 SA にてトイレ休憩
- 17 : 00 遠野市社会福祉協議会着
まごころネット初日オリエンテーション参加
- 17 : 30 翌日の活動についてのミーティング参加（活動希望予約）
明朝食買出し
- 18 : 30 たかむろ水光園にて入浴
- 19 : 30 遠野市内にて夕食
- 22 : 00 消灯



2日目

- 6 : 00 起床・朝食
- 6 : 50 宿泊施設出発
- 7 : 15 遠野まごころネットにて
体操・朝礼スタッフ紹介・振分ミーティング
昼食受取
- 7 : 45 活動地へ出発（まごころネット発注バス）
釜石駅にてトイレ休憩
- 8 : 45 おおつち保育園にて装備・機材準備、詳細指示
- 9 : 00 大槌避難所活動拠点から小槌川河川敷へ
午前の活動
- 12 : 00 河川敷にて昼食
- 13 : 00 午後の活動
- 14 : 30 炎天のため活動縮小・帰途
- 14 : 45 おおつち保育園にて用具洗浄・片付け
釜石被災地区を回る
- 16 : 00 まごころネット帰着
担当者のみミーティング参加（活動希望予約）
明朝食買出し
- 18 : 30 静養園にて入浴
- 19 : 30 遠野市内にて夕食
- 22 : 00 消灯



3日目

- 6 : 00 起床
以下2日目と同じ
- 17 : 00 亀の湯にて入浴
- 18 : 00 遠野市内にて夕食
(地元自治会からジンギスカン招待)
- 22 : 00 消灯



4日目

- 6 : 0 0 起床・朝食・宿泊施設の清掃
- 8 : 0 0 遠野市出発
- 1 0 : 0 0 東北道前沢 SA にてトイレ休憩
- 1 2 : 0 0 安達太良 SA にて昼食休憩
- 1 4 : 0 0 都賀西方 PA にてトイレ休憩
- 1 6 : 3 0 市役所帰着後解散

まごころネット・ボランティアリーダーからの注意点

- ・活動後のミーティングでは、本日の活動内容・共有したいこと・伝えたいこと・明日の求人・ヒヤリハットなど活発な意見交換があった。
- ・瓦礫の撤去などの他に、仮設住宅のげた箱作りや草刈り機、マニュアル軽トラの運転、農家の支援、花の苗植えや避難所の炊き出しの手伝いなど、様々な仕事があった。
- ・けが、感染症予防のため、長袖・ゴーグル・防塵マスクは必須。
- ・特に大槌地区は以前にトラブルがあったせいもあり、活動中の写真撮影・談笑は禁止、避難所近くでは2列縦隊で素早く無言で通り過ぎるよう指示された。
- ・『ボランティアさせていただく』という心構えが大切であると、何度も話されていたのが印象的。

反省点・課題：

- ・派遣隊の人数は、集団として行動するうえでも受け入れ側としても、15名くらいの団体がよい。マイクロバスでの利用でも可能である。
- ・東北の夏は暑く、炎天下のもとでの作業には熱中症予防への配慮が必要であった。また、津波により様々なバイ菌や化学物質が蔓延しているため、感染症予防に関しての注意が強くあった。次回以降は破傷風の予防接種を必須としたい。
- ・遠野市街は夜8時前後に飲食店が閉店してしまう。夕飯も弁当を注文し、外食するならば予約が必要であった。
- ・市から支給された毛布に付着していたダニに、ほぼ全員くわれ、悩まされた。

考察・現地の訴え：

- ・被災地の瓦礫は表通りこそ片付けられているが、一歩裏に廻ると手付かずの状態が続く。「現地のニーズはもはや瓦礫撤去ではない」との報道もあるが、まだまだ力を貸してほしい、2陣3陣と派遣してほしい旨、まごころネットの佐藤代表とボランティアリーダーのお話。
- ・自治会の皆様から、「観光でもいいからまた来て欲しい」被災地の被害を忘れないでほしいとのこと。どのような繋がりでも持ち続けてほしいとのお話を伺う。
- ・長期のスパンで支援を継続するべきとの思いを強くしたが、1～2ヶ月に1度単発での派遣は、被災地 VC に気を遣わせ手間をかけさせることがよくわかった。2日目に1日目と同じ作業をしたことで、リーダーの説明も簡略化し作業効率も向上した。季節も変わり被災地の支援ニーズの変化は注視しておくことは必要であるが、当面の期間継続して瓦礫の撤去や側溝の泥かき、放置サンマの片付けや仮設住宅の生活援助などにあたるよう、派遣隊を出すことが調布市に求められていると感じた。

参加者の感想

7月17～20日と被災地復興ボランティアに参加させて頂きました。実際に被災地に行きますと、ボランティアの必要性がまだまだあるのがわかりました。私達が今回させて頂いたのは、灯籠流しをするための河川の草刈りや清掃でしたが、流れている川の底には屋根瓦やドア、タイヤなど津波の爪痕がまだまだ残されていて、復興が思うように進んでいない現状がよくわかりました。

復興活動をするにあたっての弊害が「熱中症」と、ヘドロなどに混じっているバイ菌による「感染症」です。活動現場には必ず最低水2リットル(頭や首にかけるなど含む)、持っていくように言われましたし、活動後には道具や長靴、体に付いた泥や砂をキレイに洗い流しました。また、擦り傷など少しのケガでも感染症予防の為に隊長に報告するようにと、それとハリキリ過ぎない、無理をしない事、これらは「必ずお願いします。」と何度も言われました。

私達、全国の人達が少しずつ、少しずつ、たすきリレーをする気持ちで被災者の方々の1日1日を支えて行く事が、まだ終わりの見えない復興への長い道のりを乗り越えて行く一番の方法だと、私はそのように感じました。

まごころネット事務局のボランティアリーダーの方々も一般参加のボランティアの方々の、事務局に寝泊まりしながら、この厳しい復興活動を長い間毎日されているという事でした。

そのような方々にも出会い、一緒に活動をさせて頂き、私にも言葉では言い表せない、何か心に打つ物がありました。

また是非、ボランティアに参加させて頂きたいと思います。

(井ノ口 信幸)

お疲れ様です。ボランティアに参加した杉崎です。私が今回ボランティアに参加させて頂いた理由は2つあります。感想と共に送らせていただきます。

【1】被災地の現状を実際に目で見たい

一生に一度あるかないかの大惨事を目で見たいと思いました。実際に現地で、被災地に立つ赤い旗の説明を聞いたときに、とても悲しい思いになりました。自分が被災者の立場であったら・・・ということを考えると我が家を諦める、ということは胸が引き裂かれる思いであろうことが容易に想像できました

【2】ボランティアとして携わる人を見たい

無償で被災地のために、という一心のみで動くことのできる人はどういった人なのか、気になりました。印象に残った言葉は、「ボランティアは競争じゃない」「頑張りすぎない」といった言葉です。

私には、所謂大企業や一流企業で働く友人がいますが、彼らのマインドと、ボランティア精神というものは噛み合わないだろうな、と感じました。同時にボランティアでできることの限界も感じました。自衛隊撤退後の課題であると思いました。今回貴重な経験をありがとうございました。

(杉崎 穰滋)

まず最初に、社会福祉協議会さんには、ボランティア活動の機会を作ってくださいありがとうございます。

朝日さんには、ご迷惑をおかけ申し訳ありませんでした、帰ってきて後輩に叱られました、恥ずかしくて穴に入りたいです。

災害地は、建物の基礎だけ残って建物上部は跡形もなく見渡す限りガレキの状況を見て自然の恐さを痛感させられました、それから遠野まごころネットで多くのボランティアさんが参加されているのには驚きましたが、実際は人や道具等足りない物がたくさんある事に気づきました、個人だけでは、たいしたことはできませんが少しでも多くの人に話を伝え、ちりも積もれば山となるという言葉に心を焼き付けて、三年、五年、十年とやれる事を考え少しでも長く継続支援させていただきたいと思います。

(安土 耕作)

今回、僕がボランティアに参加した動機はボランティアをしたい気持ちより、自分の目で被災地をみたいと思ったからです。地震発生から約4ヶ月が過ぎ自分も含めまわりの人達も原発の問題を除いては東日本大震災について関心が少なくなってきたと思いました。なぜなら自分の生活にあまり関わりがなく、テレビなどのメディアも発生時に比べあまり報道しなくなりました。原発の問題は自分の生活や健康にも深く関わっています。

今回、被災地を見てまだほとんど手付かずの状況だったことと僕が見たのはほんの一部ですが津波の被害の大きさに驚きました。町の家がほとんどなくなり、がれきの町になっていて、町がホントに復興することができるのか、出来てもどれだけ時間がかかるのだろうと思いました。そして復興するためには行政だけの力では難しく長期的にボランティアが必要だと思いました。

ほとんどの人が自分の事で手一杯だと思いますがひとりひとりが今回の地震のことを忘れずに、募金をしたり、ボランティアに参加したりすることが少しずつですが被災地の復興に近づくとと思います。

(高松 護)

遠野市へのボランティア活動を本当に楽しみました。被災地の必要とされているところへお手伝いができ、大変よかったです。この経験はこれからの私の人生の中にずっと残るでしょう。被災地の荒廃し、破壊されたすさまじい状態を自分の目で直接見たときは信じられない気持ちでした。しかしながら、残った現地の方々が手を取り合って前進している姿を見たとき、勇気付けられました。被災地を訪れ、現地の皆さんのお手伝いを通して、本当の人間の精神の強さというものを直接目のあたりにすることが出来ました。

もうひとつの大事なことは、調布市のすばらしいみなさんと出会えることができ、新しい人間関係、新しい友人ができたことです。今後、調布市が企画するボランティア活動に興味がある人に、是非お勧めしたいです。

(Gregory Meryers)

7/17-20の岩手県遠野市へのボランティア活動はよかったです。もし都合が合えば再度、ボランティア活動をしたいと思います。また、ボランティア活動の内容がもっと増えても（もっと厳しくても）かまいません。私たちのグループがまごころネットのチェックポイントに一番最初に戻ってきたと思います。私たちは軽いボランティア活動を行うグループだったのでしょくか？ バスの中も空席がありましたので、東京から被災地へ寄付する物品なども運べたのではないかと思います。

(Adrian Subakti)

調布市社協さん、調布市さんのコーディネートのおかげで、スムーズに被災地ボランティアの活動することができました。ボランティアをしたくても、個人で行くのは少し不安・・・という方にとっては、

安心して参加できるよい機会だと思います。またボランティア活動を通じて、様々な方々と出会えたことも貴重な体験となりました。岩手を往復する旅は時間がかかりますが、ともにボランティア活動をする仲間同士、そして被災地で生活される方々も含め、皆さんが互いを気遣いあいながら被災地復興という同じ目的に向かって活動している姿が印象的でした。一日も早い被災地復興の為に、ボランティア活動に参加される方々が途絶えることなく、今よりももっと増えていくことを願っています。

(三好 聡子)

既に多くの方々が支援してくださっている中、少しでも何かできたらと参加しました。当初スケジュール表に活動は9時から3時半までと書いてあり、内心自分にもできるのだろうかと不安も抱えながら、気負って現地に入ったのですが、到着した翌日には気温が下がり、また活動時間も実質1日2時間だったので、少々消化不良気味ではありますが。しかし、無理をしてけがや病気になればかえって迷惑になること、移動に時間がかかることなどから、やむを得ないと思います。見方を変えればボランティア受け入れシステムの素晴らしさを実感します。試行錯誤を経てとは思いますが、

<朝礼や全体ミーティングを毎日行う>

<掲載された中から希望する活動内容に記名する>

<2～30分おきに全員休憩を取る>

<送迎バスに乗ったら名前にチェックを入れる>

<一人分の寝床スペースがわかるよう床にテープを張る>

<冷蔵庫に入れる物には日付を書き2日後には処分する>

などなど工夫が満載でした。

また、避難所近くの活動場所であったため、少し手前で準備を整え、現地に行ったら静かに速やかに移動するなど、何より被災者への心配りが細やかでした。

各家のがれきはそのまま残っており、まだまだ復興までには長い年月がかかることを痛感しましたが、今回最も心を揺さぶられたのは、青々と茂った田んぼの稲と、波ひとつ立っていない穏やかな海でした。折しも、汚染されたわらを餌として食べた肉牛が、出荷停止となった時期だったので、丹精込めて育てた稲がそのようなことにならなければと願うばかりです。また、豊かな恵みをもたらしてきた海が一瞬にして牙をむき、その海を毎日目にする地元の方の心中はいかばかりかと思います。

また思いがけず、外国の方、異業種の方々、遠野市の方々などと交流ができたことは、出発前には予想もしなかった大きな副産物です。「インドネシアでも大きな津波があったが、何より宗教によるテロが怖い」「外国の方々はボランティアへの意識が高い」「休日はほとんど消防団の活動に充てている」などなど。そして何より聞いてみたかった遠野市の方の思い。「自分のところが被害を受けなかったからといって、平気ではいられない。昔から遠野市からは農産物を、大槌町・大船渡市・陸前高田など海沿いの町からは海産物をと、行き来があるのだから」と。市長だけでなく市民一人一人がこのように感じているからこそ、遠野まごころネットは成り立っているのだと納得しました。

最後に、今回のボランティア活動を企画してくださった調布市、遠野市、調布社協、そして衣食住に至るまでお世話してくださった、朝日副センター長、多門さんに心から感謝申し上げます。

(大沼 静子)

～復興支援ボランティアに参加して近くなった東北～

連日報道で伝えられる被災地の様子を見て、私も現地に行って何かお手伝いできないかと方法を探し

ている時に、調布市社協主催でボランティアを派遣することを知り、「なんてタイムリー！」と参加させていただきました。そして、やはり自分の目で見て感じることの大切さを改めて知る貴重な機会になりました。

大学生、市内消防団の方や、企業から派遣された方、市職員など総勢 18 名の調布市社協チームが活動したのは大槌町を流れる小槌川でした。そこで、河川敷の草刈、川の中のがれきの撤去を行いました。

小槌川は毎年鮭が遡上することで有名で、この時もトンボが飛び交う穏やかな川でしたが、3月11日のあの時には津波が遡り、付近の住宅の1階天井まで水が来たそうです。その時のすさまじい状況を物語るように川の中からは、瓦や家屋の建材、大きな金属のパーツ、衣類、家電品など様々なものが出てきました。川底から、また川のよどみの泥のなかからそれらを見つける度に、一瞬で平穏な生活を奪われた方々の無念の思いを感じざるを得ませんでした。8月11日には今回清掃をした場所で精霊流しが行われるということです。その日には遺族の方たちの想いを込めた灯が水面に映り、尊い命を落とされた方たちの霊が慰められることを願いながら作業をしました。

作業の帰りに目の当たりにした壊滅的な沿岸部の光景からは、復興には長い時間を要することが実感を持って迫ってきました。遠野まごころネットのまとめ役の遠野市社協の佐藤会長も、これから仮設住宅への移行が進むと、孤立する人が増え、メンタル面でのサポートが必要になってくるとおっしゃっていました。今後も長期に渡っての様々なボランティア活動が期待されています。

宿泊先でお世話になった遠野の方たちの温かさに触れられたこともあって、今回の活動を通して、東北をより身近に感じるようになりました。また、全国から支援の想いを持ったたくさんの方々が集まってきた現地の様子を見て、まだまだ日本は大丈夫という思いを強くしました。関心を持ち続けること、そして自分にできる行動をこれからも考えていこうと思います。

今回一緒に活動をした皆さんと連帯感を持てたこともうれしい収穫でした。このボランティア派遣を企画してくださった調布市と、実現に向けて尽力してくださった社会福祉協議会に感謝します。

(ドウマンジュ 恭子)